OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベトナム人日本語学習者による日本語の名詞アクセントの産出
Author(s)	グエン, ティ フェン チャン
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 129-138
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71154
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ベトナム人日本語学習者による日本語の名詞アクセントの産出

グェン　ティ　フェン　チャン

1.　はじめに

ベトナム語母語話者の日本語音声の産出は他の母語話者（中国語、韓国語、タイ語）に比べ発音の自然さが最も低く、印象も悪いと指摘されている（松田 2016）。日本語母語話者が外国人学習者の発音を評価する際、単音よりも韻律が「日本語らしさ」に大きく関わっているという（佐藤 1995）。そのため、自然な日本語の発音を身につけるためには、アクセントやイントネーションといった韻律の習得が必要であると考えられる。しかしながら、ベトナム語母語話者におけるアクセント、イントネーションの音声指導はまだ十分に注目されていない。さらに、日本語アクセントの習得実態に着目した研究も数少ない。

そこで、本稿は日本語のアクセントの産出に着目し、ベトナム人学習者のアクセント産出の特徴について考察する。

2.　先行研究

管見の限り、ベトナム人日本語学習者を対象としたアクセント産出の研究は轟（1992）、金村（1999）、磯村他（2016）、磯村・松田・ユパカー（2016）、Nguyen（2016）しか見られない。そのうち、轟（1992）、金村（1999）は名詞の単独発音に関する研究で、磯村他（2016）、磯村・松田・ユパカー（2016）と Nguyen（2016）のみが調査語を含むキャリアセンテンスを使用する研究である。しかし、キャリアセンテンスを使用する研究の中では、異なる結果が報告されている。

磯村他（2016）の研究は海外 9 カ国の日本語学習者を対象とした産出調査である。研究内容は（1）アクセントの情報を何も与えずに読み上げる、（2）単語ごとのアクセント核の情報を見ながら母語話者の発音を模倣する、（3）アクセント核の情報を見ながら自力で発音する、という三種類のタスクを被験者に課し、それぞれの成績を比較するというものである。ベトナム人学習者に関しては、日本語専攻の学生 7 名を対象とした 1〜4 拍の 42 語とそれぞれの単語を含むキャリアセンテンス「〜です」の発音調査を行った。調査結果としては、タスク（1）の場合には正答率が半分以下（35%）であったが、タスク（2）を行うことにより、それが大幅に修正される（正答率 : 86%）ことが明らかとなった。そして、アクセント情報だけを示すタスク（3）で、タスク（1）よりも正答率が高くなり（53%）、学習効果がすぐに見られた。それによりアクセント記号や音声を表示することは学習者のより自然な日本語の韻律習得に効果があると主張されている。

ただし、ベトナム語は声調言語で、一音節には一つの声調が付与される。その音節が音の高低または変化（曲調）によって区別される。そのため、ベトナム人学習者は音節を発音単

位として意識しているのではないかと思われる。よって、日本語のアクセントを産出する際、モデル音声を使用しなくても単語の各拍に高低の高さを明確に表示されれば、学習者は正しく発音できるとの仮説が立てられる。

磯村・松田・ユパカー（2016）は上記の磯村他（2016）の研究の一部を成しており、タイ人とベトナム人学習者の日本語アクセント発音実験の詳細な報告である。調査内容も調査対象も磯村他（2016）と同じものである。調査結果としては全体的に尾高型の正答率がタイ人学習者と比べると高い傾向が確認された。この傾向はキャリアセンテンスにおいて「〜です」と共起させたこと（「です」のところで音の高さが変わり、主として下がること）が原因である可能性があると主張した。

一方、Nguyen（2016）では、ベトナム人学習者 40 名を対象に、2〜6 拍の名詞単独語とその単語を含むセンテンス（「〜が有ります/います」）の産出調査を行った。結果としては、「0 型」（平板型）と「-2 型」（語末から数えて 2 拍目の後にアクセント核が来る）の出現率が最も多かった。また、助詞「が」は高調で発音する傾向があるため、「-1 型」（尾高型）の出現率が低い（全体の 1.4%）と報告した。

上記の磯村・松田・ユパカー（2016）の研究によると、ベトナム人学習者の発音では尾高型アクセントになることが多い。しかし、Nguyen（2016）では、「0 型」と「-2 型」の出現率が最も多く、尾高型の出現率が低い結果となっている。異なる結果が見られるのは、異なるキャリアセンテンスを用いた影響である可能性がある。そこで、本調査では、ベトナム人学習者が語アクセントをどのように発音するのか、どのような発音傾向があるのか、また、キャリアセンテンスがどのように影響を与えるのかをより詳しく調べるため、「〜です」及び「〜が有ります/います」センテンスの両方を用いて産出調査を行った。また、音声とアクセント核が表示されず、高低線（各拍に高か低かを表す線）を見るだけで学習者が自力で発音できるかどうかも考察する。

3.　調査内容

3.1 被験者

被験者はベトナム中部出身の DN 大学の日本語専攻大学生 10 名（3〜4 年生の各 5 名）である。すべての被験者は大学入学と同時に日本語学習を始め、来日経験なし、年齢は 20〜22 歳である。調査時点において 4 年生の学習者（以下は DN4 とする）は音声に関する授業に既に参加しているため日本語のアクセントの制約、役割に関する基本的な知識は持っており、発音や聞き取り練習の指導も受けている。3 年生の学習者（以下は DN3 とする）はアクセントに関する指導をまだ受けていない。

3.2 調査方法

本調査は 1〜4 拍の特殊拍を含まない名詞 42 語（次のページの表 1 に参照）及びその単

語を含むセンテンス（「〜が有ります/います」と「〜です」）を用いる読み上げ調査である。全ての調査語は既習語で、学習者が 1 年生の時に使用した教科書『みんなの日本語 初級（上下巻）』と 2 年生の前期に用いる教科書『テーマ別中級から学ぶ日本語』に出現した名詞である。

表 1　調査語リスト

1 拍	（0）胃・葉・日　　（-1）木・手・目
2 拍	（0）姉・椅子・顔　　（-1）足・部屋・紙　　（-2）秋・傘・空
3 拍	（0）田舎・形・子供　（-1）痛み・表・話　　（-2）七つ・中身・お菓子 （-3）家族・設備・高さ
4 拍	（0）友達・お祭り・カタログ　（-1）一日・一つ目・二つ目 （-2）足跡・居眠り・玉ねぎ　（-3）一昨年・果物・九つ （-4）神様・自ら・システム

上記の調査語をタスク 1〜2 の 2 種類のタスクで読んでもらい、録音した。

タスク 1：アクセント記号が何も書かれていない状態で読み上げる。

例 1：　かさ　　かさです　　かさがあります

タスク 2: 高低線（以下アクセント線とする）だけを見て自力で発音する。

例 2：　か⌉さ　　か⌉さです　　か⌉さがあります

調査語の提示方法に関しては語とその語を含むセンテンス（「〜です」、「〜が有ります/います」）をランダムに、PC のディスプレイ上にパワーポイントで表示した。1 語とその語を含むセンテンスを 1 つのスライドに映した。

4.　調査結果

調査データを数量化して、学習者の回答パターンを集計し、正答と誤答の二つのパターンに分けた。誤答の中、東京方言で起こりうるアクセントパターン（以下は「有りえる」とする）と東京方言で起こりえないアクセントパターン（第 1 拍目と第 2 拍目の高さが同じ場合（「0・-1 型」、「0・-2 型」）と平板型以外のアクセントパターンで、「です」と助詞「が」を高調で発音する場合（「有りえない【助詞】」）、以下は全て「有りえない」とする）にまとめた。

4.1　タスク 1 の結果

タスク 1 の結果は「正答率」、「有りえる」、「有りえない」のに分けて、次のページの図 1 に示す。

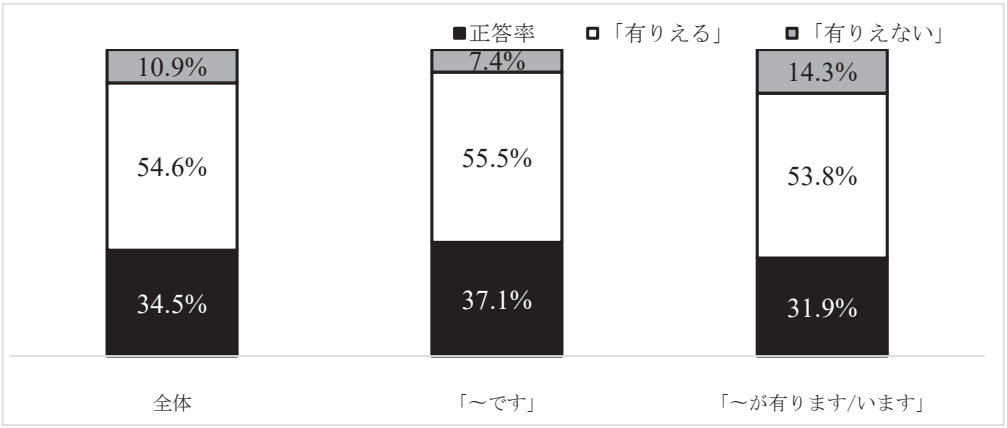

図 1　タスク 1　調査結果

図 1 によると、全体の正答率は 34.5%であり、磯村他（2016）の結果（タスク（1）の正答率：35%）を維持している。

次に、調査語の拍数による正答率について考察する（表 2)。

表 2　タスク 1　拍数別の正答率

	「〜です」	「〜が有ります/います」
1 拍語	55.0 %	48.3 %
2 拍語	54.4 %	46.7 %
3 拍語	35.0 %	26.7 %
4 拍語	21.3 %	20.7 %

調査結果では、1 拍語の正答率が最も高く、4 拍語の正答率が最も低い。「〜です」センテンスでも「〜が有ります/います」センテンスでも拍数が多ければ多いほど正答率が下がって行くことが観察できた。

また、キャリアセンテンスはアクセント型の出現率にどのように影響を与えるかも考察した。

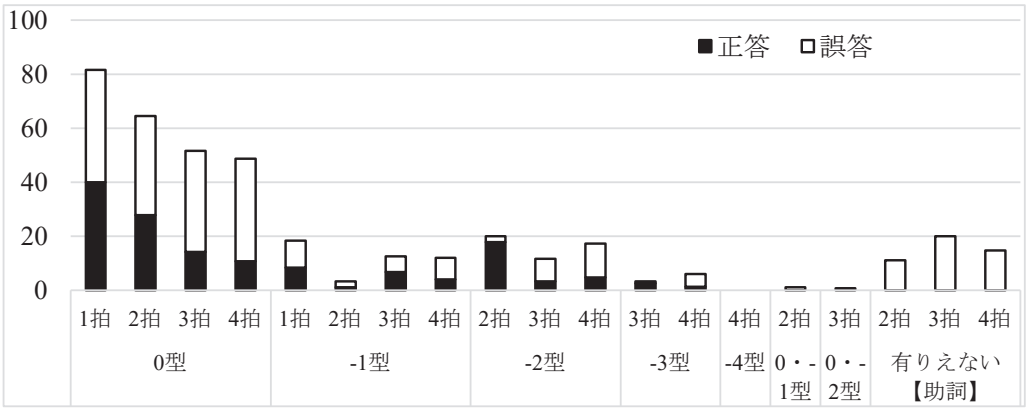

図 2　　タスク 1「〜が」センテンス　各アクセント型の出現率　（%）

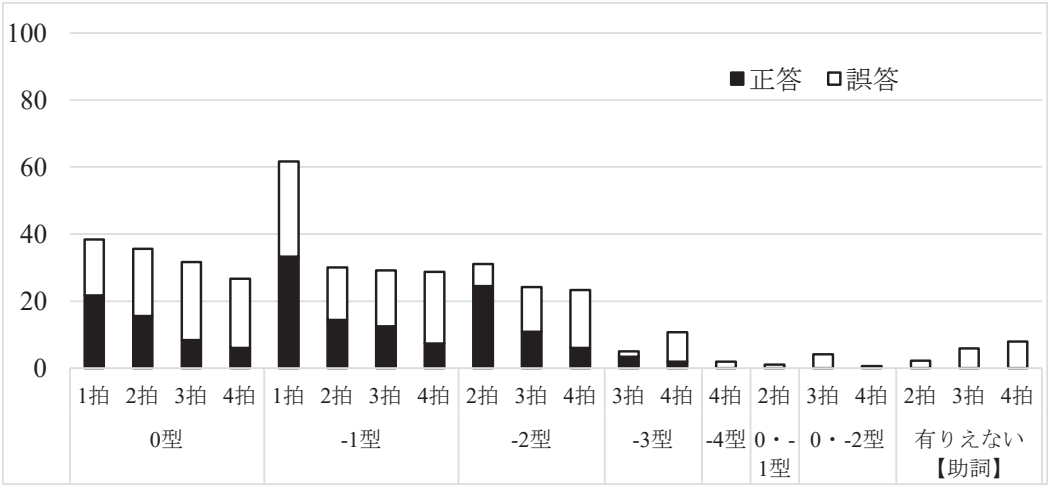

図 3　タスク 1「〜です」センテンス　各アクセント型の出現率（%）

図 2 は「〜が有ります/います」センテンスの調査結果で、図 3 は「〜です」センテンスの調査結果を表す。結果によると、「〜が有ります/います」センテンスの場合、「0 型」の出現率が際立って高い。それに対し、「〜です」センテンスでは他のアクセントパターンの出現率と比べると「-1 型」の出現率の方が高い。また、「〜です」センテンスでも「〜が有ります/います」センテンスでも「-3 型」と「−4 型」（それぞれが語末から数えて 3 拍目、4 拍目の後にアクセント核が来る）の出現率が低いことが見られた。

更に、平板型以外のアクセントパターンには後続語「です」と助詞「が」を高調で発音することを「有りえない【助詞】」で表している。図 2 では、「〜が有ります/います」センテンスの「有りえない【助詞】」の出現率は図 3 の「〜です」センテンスの「有りえない【助詞】」の出現率の倍である。名詞の後続語の発音に関して詳しく考察すると、次の結果が見られた（表 3）。

表 3　タスク 1 後続語の発音傾向

「です」L	「です」H	「が」L	「が」H
63.1%	36.9%	28.8%	71.2%

（後続語「です」を低調（低くまたは下降）で発音する場合は“「です」L”で、高調（高くまたは上昇）で発音する場合は“「です」H”で表記する。後続語「が」を低調で発音する場合は“「が」L”で、高調で発音する場合は“「が」H”で表記する。）

上記の表 3 によると、助詞「が」を高調で発音する傾向が強い（71.2%）ため、「〜が有ります/います」センテンスでは「0 型」と「有りえない【助詞】」の出現率が際立って高いことが考えられる。それに対し、「です」を低調で発音する場合が多い（63.1%）ため、「〜です」センテンスでは起伏型になる場合が多く、特に「-1 型」の出現率が最も多い。この傾向が見られるのは、ベトナム人学習者が名詞の後続語「です」や助詞「が」が固定の高さを持っている一つの音節[i]として意識されているためではないかと思われる。ここまではキャリ

アセンテンスがアクセントの産出に影響を与えることを考察した。

4.2　タスク 2 の結果

タスク 2 の調査はアクセント線を見るだけで、学習者が自力で発音できるかを考察するものである。使用される調査語とセンテンスはタスク 1 と同じである。録音の前に、学習者にアクセント線の意味や発音の仕方に関して簡単に説明を行った。

タスク 2 の結果は図 4 に示す。なお、タスク 2 の結果をタスク 1 と比較し、アクセント付与の効果を以下のように考察した。

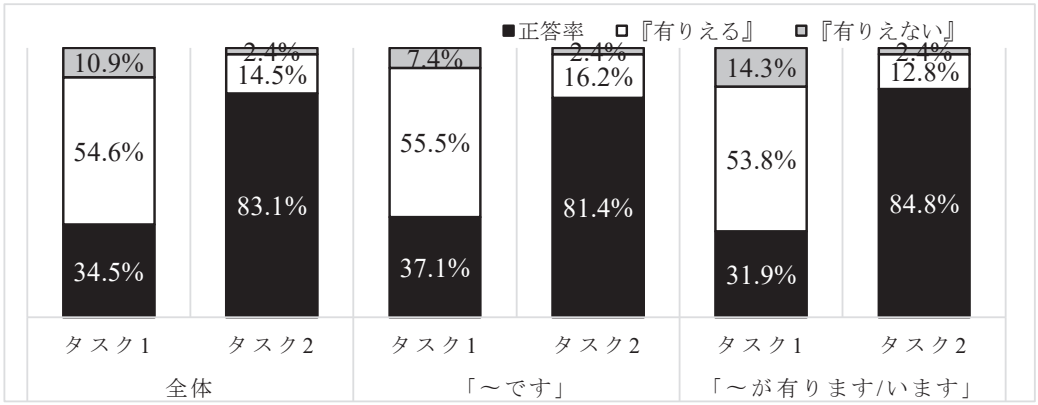

図 4　タスク 1・タスク 2 の調査結果

タスク 1 と比べると、正答率が大幅に上がった（83.1%）。磯村他（2016）のタスク（2）の正答率（86%）より低いが、タスク（3）の結果（正答率 : 53%）を上回った。タスク 1 では、「～です」センテンスの正答率は「～が有ります/います」センテンスの正答率より高かったが、タスク 2 では「～が有ります/います」センテンスの正答率の方が高い。また、全体のデータからタスク 1 の「有りえない」の出現率は 10.9%であるが、タスク 2 では「有りえない」の出現率は 2.4%に下がった。

なお、拍数別の正答率も考察して、結果は表 4 に示す。

表 4　タスク 2　拍数別の正答率

	「～です」	「～が有ります/います」
1 拍語	76.7 %	88.3 %
2 拍語	87.8 %	95.6 %
3 拍語	84.2 %	83.3 %
4 拍語	77.3 %	78.0 %

タスク 1 では、拍数が多いほど正答率が下がって行く傾向が見られたが、タスク 2 ではそのような傾向が見られなかった。3 拍語・4 拍語の正答率が 77%以上に上がり、1 拍語の正答率より高い場合も見られた。アクセント線が表示されるタスク 2 では、拍数が多い単語でも正確に発音できることが考察できた。

更に、本調査での被験者はアクセントに関する知識を持っている学習者 DN4 と知識を持っていない学習者 DN3 であるため、学習歴及びアクセントの知識がアクセント産出に影響を与えるかどうかを考察した。結果は図 5、図 6 に示す。

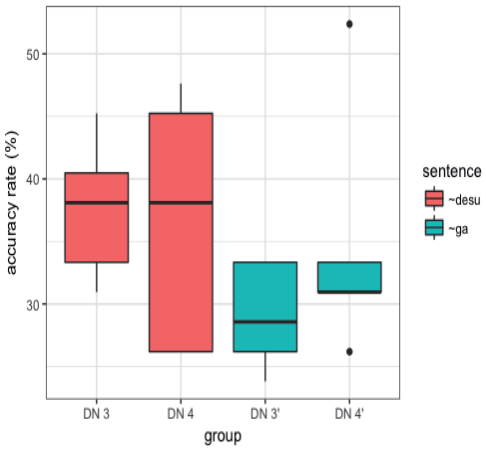

図 5　タスク 1　学習者別の正答率

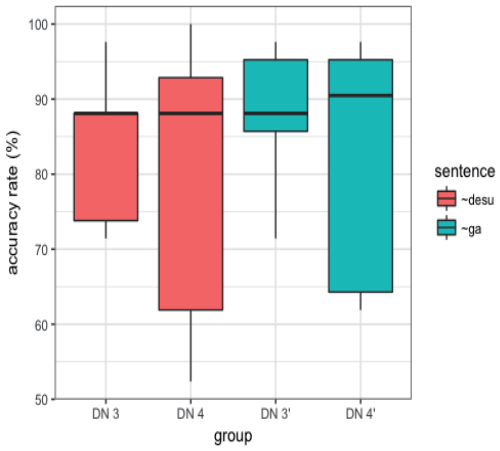

図 6　タスク 2 学習者別の正答率

（上記の図 5 と図 6 では、DN3 と DN3'が 3 年生の学習者を、DN4 と DN4'が 4 年生の学習者を示している。）

図 5、図 6 によると、タスク 1 でもタスク 2 でも、「〜です」センテンスの場合、DN3 と DN4 の平均値はあまり変わらない。が、「〜が有ります/います」センテンスの場合、DN4 の平均値は DN3 のより高い。また、最大値に関しては、タスク 1 でもタスク 2 でも同じ傾向が見られ、「〜です」センテンスの場合、DN4 の最大値は DN3 より高いが、「〜が有ります/います」センテンスではあまり変わらない。つまり、DN4 の平均値と最大値は DN3 より高いか同じ割合であることが考察された。ただし、全体を見ると、DN4 の最低値は DN3 より低く、個人差に関しても DN3 より大きい。いわゆる、アクセントに関する知識を持っている DN4 が必ずしも DN3 より正確に発音できるわけではない。学習者の個人別の分布データを通して、学習歴とアクセントに関する知識はアクセントの産出に影響をあまり与えないと言える。

なお、図 5 の「〜が有ります/います」センテンスの DN4 の外れ値を除くと、タスク 1 では学習者の正答率が全て 50%以下である。それに対し、図 6 の結果によると、全ての学習者の正答率は 50%以上であった。このことは、アクセント線を表示することで学習者のアクセント産出の正答率が上がったことを表している。

タスク 2 の正答率は上がることが分かったが、各アクセントパターンの出現率はどうなるかを調べる必要がある。その結果を次のページの図 7 と図 8 に表す。

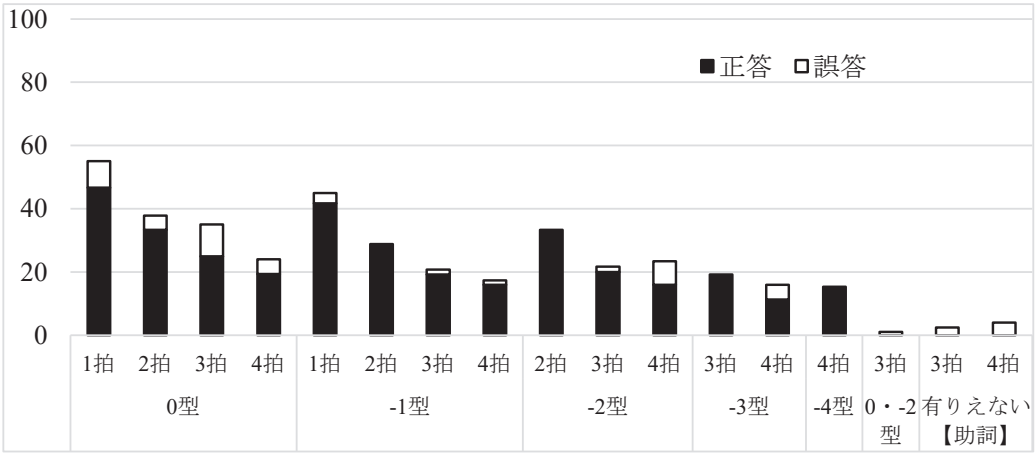

図 7　　タスク 2「〜が」センテンス　各アクセント型の出現率（%）

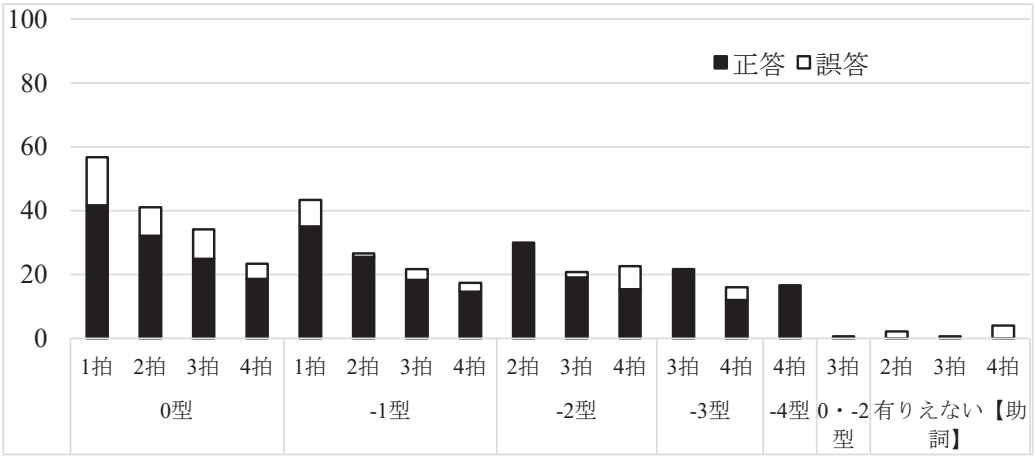

図 8　タスク 2「〜です」センテンス　各アクセント型の出現率（%）

図 7 と図 8 によると、アクセント型に関わらず正答率が大幅に上がったことが分かった。「〜が有ります/います」センテンスの場合、タスク 1 では「-1 型」の正答率が 10%以下であるが、タスク 2 では大幅に上がり、「〜です」センテンスの「-1 型」の正答率より高かった。なお、タスク 1 では助詞「が」を高調で発音する傾向が強いため「0 型」の誤答率が際立って多かったが、タスク 2 では「0 型」の誤答率が大幅に減少した。

本稿のタスク 1 の結果によると、「〜です」センテンスの後続語「です」を低調で発音する傾向があり、「-1 型」の出現率と正答率が他のアクセント型と比較すると最も多かった。しかし、タスク 2 では、アクセント線を見ながら発音するため、学習者は「です」を正しい高さで発音し、「0 型」「-2 型」の出現率と正答率は「-1 型」より高かった。

また、タスク 1 では「〜が有ります/います」センテンスでも「〜です」センテンスでも「-3 型」と「-4 型」の出現率が非常に低いことを見たが、タスク 2 では「-3 型」と「-4 型」の正答率もかなり上がった。学習者が苦手なアクセントパターンでも発音できるようにな

ったのではないかと考えられる。更に、タスク 1 と比較すると、「有りえない【助詞】」の出現率もかなり下がった。つまり、アクセント線を示すだけで各アクセントパターンの正答率が上昇し、有りえないアクセントパターンの出現率が減っていくことが分かった。

先行研究では音声やアクセント核を表示することはアクセントの学習に効果があると示している。本調査でも、調査結果を通して、アクセント線を使用することはアクセントの正答率の上昇に大きく貢献する可能性があることが観察できた。

5. おわりに

本稿ではベトナム人学習者のアクセント産出調査を通して、「〜が有ります/います」センテンスでは助詞「が」を高調で発音するが、「〜です」センテンスでの後続語「です」を低調で発音する傾向が強いことが分かった。また、「〜が有ります/います」センテンスでは「0 型」の出現率が際立って多く、「〜です」センテンスでは「-1 型」の出現率が最も多かった。つまり、キャリアセンテンスはアクセント産出に影響を与えることが確認された。

また、アクセントの産出特徴に関しては、タスク 1 の結果によると、語の拍数が多いほど正答率が下がることも分かった。

タスク 1 とタスク 2 の調査結果から、学習者の学習歴やアクセントに関する知識はアクセントの産出に影響を与えず、そして、個人差が大きいことが明らかになった。よって、本研究ではアクセントを指導する際、学習歴ごとに指導する必要性は認められなかった。しかし、本調査の被験者の数は十分とは言えないため統計的な有意差を示すには至っていない。今後、被験者の人数を増やして、学習者のアクセントに関する知識、日本語学習やアクセントの産出との関係に関しては更に研究する必要があると考えている。

更に、タスク 2 の結果からは、アクセント線を表示するだけで正答率が大幅に上がることが明らかとなった。なお、有りえないアクセントパターンの出現率も大幅に減少することが分かった。しかしながら、正答率が上がることが学習者のアクセント習得を意味するものではない。それをいかに習得に繋げていくかは今後の課題としたい。

以上の調査結果が、ベトナム人学習者によるアクセント産出の傾向の一端を示し、それが日本語音声教育への一助となることを望む。

参考文献

鮎澤孝子（2003）「外国人の日本語アクセント・イントネーション習得」『音声研究』第 7 巻第 2 号、47-58

磯村一弘・松田真希子・ユパカーフクシマ（2016）「タイ語話者およびベトナム語話者による日本語アクセントの実験－アクセント記号の効果に注目して－」『2016 年日本語教育国際研究大会口頭発表』、1-4

磯村一弘・阿部新・林良子・柴田智子・峯松信明（2016）「日本語音声教育の現状と課題－

アクセントの教育を中心に」『2016 年度日本語教育学会口頭発表』、54-65
金村久美 (1999)「ベトナム語母語話者による日本語の発音の音調上の特徴」『ことばの科学』名古屋大学言語文化部言語文化研究会、第 12 号、73-91
佐藤友則（1995)「単語と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』国際交流基金、第 5 巻、139-155
轟木靖子（1992)「ベトナム語母語話者の日本語名詞の発話に伴う音調について」『日本語の韻律に見られる母語の干渉（2)』国立国語研究所、105-139
林良子（2016）「日本語初級学習者によるアクセントの知覚と生成」『2016 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、58-60
松田 真希子 (2016)『ベトナム語母語話者のための日本語教育―ベトナム人の日本語学習における困難点改善のための提案―』東京：春風社
Nguyen Thi Huyen Trang（2016)）「ベトナム人学習者による日本語の名詞アクセントに関する考察―ダナン市・ホーチミン市での調査から―」『第 30 回日本語音声学会全国大会予稿集』、82-87

参考資料

『みんなの日本語 初級（上下巻)』（1998）スリーエーネットワーク
『テーマ別 中級から学ぶ日本語』（2006）くろしお出版、三訂版
『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）NHK 出版

[i] 後続語「です」は日本語では 2 拍語となるが、二拍目の母音を無声化することによって“des”のようにベトナム語の一つの音節として捉えられる。金村（1999）はその母音無声化の現象が多くの学習者に共通して見られると述べた。